

もう、あと、少し歩けば、滝尻に着くというところで……安珍の足は止まってしまった。

そこに分かれ道があった……。いつも、真砂の地に立ち寄る事を楽しみにしている安珍は……。この道を行った事はない……。が……。近年に出来た……。山越えをして……。田辺に抜ける裏道だとは……。聞いている。

「おや？……安珍さんではないですかな……。」

分かれ道で止まっている安珍の後ろで、声がかかった。

振り向くと……。人の良さそうな顔があった……。昨日、宿で一緒だった中年の僧だ……。こちらは、名前も覚えていないのに……。向こうは、覚えてくれていているらしい……。

「早くに出立なされたので、もうとつくに、先に行っていると思っていたのですよ……。潮見峠の方へ行かれるのですか？」

「いや、まだ、迷っているのです……。行った事がないので……。これは、どういう道ですか？」

「まあ、山道ですからな……。険しい道ですよ……。しかし、今日は……。岩田川も水量が多くなっていると聞きますし……。こちらの道の方が、無難かもしれませんなあ……。」

「では、あなたは……。」

「いや、私は、滝尻へ行きます……。多少、帰るのが遅くなっても、正式の順路を歩きたいと思っていますからな……。では、これで、お別れしましょう。気をつけて……。お行き下され。」

中年の僧は、安珍が、潮見峠の方へ行くものと決めつけているようだ。

安珍は、それに背中を押されるように、潮見峠に向かって歩き出した……。

……。清姫が大人になって……。自分の大人としての愛を、ちゃんと受け入れられるようになるまで……。それまで、
姫には、会うまい……。

安珍は、自分の心に言い聞かせている……。

